

八幡弓

前シテ	武内の神の化身
前ツレ	玉垂の命の化身
後シテ	高良の神（武内玉垂二神合一）
ワキ	奈良の臣下
ツレ	同
所 前	大和奈良
後 山城男山	

「君が恵みの十寸鏡。く。曇らぬ影を仰がん。

「抑是は奈良の帝に仕へ奉る臣下也。扱も君御政道
たゞしうましますに依て。國富民豊かなり。然る

間四方の国々より。種々の御調物を捧げ奉り候。

中にも当國山城の御調物未参らず候。参りて候
はゞ奏聞申さふざるにて候。いかに誰か有。山城
の御調物来てあらばこなたへ申候へ。シカぐ

シテ、一声、二人「武士の弓張月の男山。出てや君を照すらん。

ツレ
「誓ひを何と岩清水。

二人「ふかき恵みぞ。頼もしき。

サシ
「是は山城の国。八幡山の辺に住居する。賤しき民
にて候。

二人「実や治まる習ひとて。四方の国々残りなく。運送
の御調。弥増なり。

「忝なくも此君の。く。いにしへすませ給ひける。

宇治の里を余所に見て。今日甕の原和泉潟。ころ

も鹿脊山うちすぎて。漸々行けば程もなく。都に早く着にけり。く。

ワキ詞
「不思議やな。余の国々よりは色々の。御調を備ふる中に。山城の国に限つて弓箭を捧る事は。いかさま謂の有やらん。委く申候へ。

シテ
「夫弓と申は。天地陰陽を表し。四徳五行の形を顯す。

ツレ、カル
「されば神には桑の弓。蓬の矢にて国を治め。怨敵

を払ひ世を静め。

シテ
「悪魔を退く宝とかや。

同
「我もいやしき身なれども。く。かゝる事をば白真弓。君にひかれて民までも。豊かに住る有難や。く。

クリ地

「抑弓箭を以て世を治めし始めといつば。先我朝におるては。応神天皇にておはします。

サシ
「しかれば神功皇后。詔して宣まはく。縦ひ女人の

身なりとも。先帝の御為なれば。異国へむかはで
かなふまじと。始めて御鎧を召し弓箭を帶し。み
づから異狄を。平げ給ふ。

クセ

「其後宇佐の宮に移りまし皇子。御誕生成給ふ。則
応神天皇は。八幡宮の御事なり。威重三尊の形を。
行教の袖にうつして。此幡の本にこめ給ふ。八重
旗雲を指南にて。宗廟の神と顯はれ。弓矢の家を
守らん。されば今の御代。仰ぐに付て愚かならず。
すなほなりけり。

シテ

「君は船臣は水。水よくふねをうかべては。臣よく
君を仰ぐ世の。幾久しさも白真弓。八百万代を治
めつゝ。又は仏法王法の。治まる国となる事は。
一張の弓のいきほひたり。東南西北の敵をやすく
たいらぐる。

ロンギ地

「不思議なりとよかたぐは。く。凡夫ならず覚

えたり。其名を名乗おはしませ。

シテ

「我名を何と石清水。深き誓ひを守らんと。是まで

現じ来れりと。

地「二人の者はたちまちに。ふたつの鳩とあらはれて。

八幡をさして飛で行。く。(中入)

ワキ、カル
「忝なくも大内は。此八幡山にぞ御幸なる。

地「巫八乙女もろともに。

歌、同「花を手折て身をかざり。く。猶も奇特を見るや

とて。信心を起し祈念する。く。

後シテ、一声
「我は是本地玉垂命武内の神成が。弓箭の家を守らん為。今又顯はれ出たるなり。

地「万代迄も栄へゆく。松をかざしの袂かな。(舞)

同「そもそも四方をふうずる。く。三尺の剣の光には。

シテ「怨敵の四魔を降伏し。非法を治む政事。

地「扱又天津空社に。差上げ給ふ舞の手は。天長かれ

と祈りて。かなづるまでの手成ゆへ。

シテ
「手を折足を揚るは。

地
「是大日の陽分。

シテ
「しゆめつ法界とかなづる舞の手なるゆへ。太平楽
と名付たり。

同
「又はぶつしやうの。軍に向ふ度毎に。陣を破れる
舞なれば。破陣樂とも名付たり。実ありがたき
君が代の。ばんぜいらくぞめで度。く。